

日本母性看護学会ニュースレター

The Japan Academy of Maternity Nursing Newsletter No. 1

発行 日本母性看護学会 事務局: 〒514-0116 三重県津市夢が丘 1-1-1 三重県立看護大学内 TEL 059-233-5605 / FAX 059-233-5666

日本母性看護学会ニュースレターの発行によせて

前原澄子

1999年6月に発会した本学会も、第3回の学術集会を終了し、この度ニュースレター第1号を発行する運びとなりました。着実に発展の歩みを続けていることを実感し嬉しく思い、それぞれの役割を果たして戴いている役員の皆様、会員の皆様に感謝致します。

これまで、母性看護に関する学会はいくつかあり、私たちはそれぞれの学会で母性看護を討論してきました。しかし、近年の母性の健康問題が多様化・複雑化している時に、これらの解決のために、複数の専門領域の人たちが共同して当たらなければならなくなっているときに、看護が果たさなければならない役割を明確にしていかなければならなくなっています。

そのために、科学的根拠に基づいた看護方法や、看護実践を評価できる方法を開発して行かなけれ

ばなりません。他の領域の人たちにも、説明できる看護実践の方法やその評価法をもつことによって、看護独自の役割が明確になっていくのではないのでしょうか。

母性看護学独自の研究成果を貯蓄し、体系的に発展させていくことにより、母性看護学の学問としての発展が期待されます。そして母性の健康福祉に貢献でき、後輩にその方法を受け渡していくことも可能になるのではないのでしょうか。

このような研究が本学会から多く産出し、本学会の誕生の主旨が生かされ、同じ思いの人々が集まり母性看護の発展に向けて語り合えることを期待します。

このニュースレターが、学会メンバーを結ぶ役割を果たしてくれる様に発展することを願っています。

本会の歴史

- 1.平成11年1月30日 東京港区にある新田町ビルにて発起人代表者会議が開催されました(この場において設立準備委員会が発足しました)。
- 2.平成11年6月26日 三重県立看護大学にて、日本母性看護学会創立総会と第1回日本母性看護学会学術集会(会長:前原澄子)が開催されました。設立総会の場において前原澄子発起人代表から設立に至る経緯・趣旨が説明され、会則につい

- ての承認、理事・幹事・監事の決定が行われました。
- 3.平成12年6月24日 旭川において、第2回日本母性看護学会学術集会(会長:野村紀子)が開催されました。
- 4.平成13年6月23・24日 岩手県立大学において、第3回日本母性看護学会学術集会(会長:石井トク)が開催されました。

論文投稿のお誘い!

次回3号の学会誌の原稿締め切りは
ふるってご応募ください。

2001年10月31日(水) です。

第4回日本母性看護学会学術集会 企画委員会発足！

第4回日本母性看護学会学術集会 会長 今関節子（群馬大学医学部保健学科）

第4回日本母性看護学会学術集会のための企画委員会は8月11日(土)に発足した。

企画委員は、県外からお一人に依頼したのみで、母性看護に関わる県関係者、前橋・高崎市の母子看護担当の看護職、母性看護学の教員、病院の婦長の他、学内からは看護学専攻主任をはじめ母性看護学の教員、地域・在宅看護学の教員が応援してくれることになり、総勢18人の大所帯となった。大変活気があり感謝している。

メインテーマは「看護が担うウィメンズヘルス」でいこうということになり、主なプログラムには特別講演、理事長講演、シンポジウムが企画された。特別講演・シンポジウムにはメインテーマにふさわしい内容と講師が複数あがり、活発な意見交換がなされ、次回9月8日の会議で決定することになった。日時は、平成14年6月29日(土)の1日間を、日の長い時節でもあり目一杯やろうということになった。場所は、群馬県前橋市新前橋にある「群馬社会

福祉総合センター」で、8階の大ホール(335席)をメイン会場に、一般講演は7階2室や状況に応じては地階も確保した。会場へのアクセスは上越・長野新幹線で高崎までおいでいただき、そこから両毛線か上越線に乗り換えて2つ目(所要時間約8分)の「新前橋駅」下車で、東口から3分である。高崎、前橋間の電車は、朝夕約10分間隔である。遠方の人で宿泊を希望する場合は、高崎駅周辺のいずれも3~4分以内に5つほどホテルがあり、いつからでも予約可能で収容能力は十分である。全国へのご案内は9月中には実施したいと計画している。4年目を迎え、この学会の特性を活かした確固たる看護学会への発展に向けて、群馬でも全力を尽くしたいと思っている。皆様のご指導、ご援助を心よりお願い申し上げます。

《第4回日本母性看護学会開催案内》

開催日時：2002年6月29日(土)

開催場所：群馬社会福祉総合センター

第3回日本母性看護学会学術集会報告 ~お教えします、裏の裏!!~

第3回日本母性看護学会学術集会事務局 長 福島裕子

6月23、24日の両日、岩手県立大学を会場として第3回日本母性看護学会学術集会が開催されました。メインテーマは「母性看護学の情報化と国際化」21世紀を象徴するテーマでした。当日は天候にも恵まれ、自然豊かなみちのくの岩手山の裾野に広がるキャンパスに、日本全国から約200名が集まりました。表面上は大きなトラブルは無かったものの、裏の事務局では冷や汗たらたらが出来事がありました。ここでは、そんな事務局の裏話をご報告いたします。

進行時間が押し押し！！

学会初日は西澤潤一氏(岩手県立大学学長)の特別講演「母性の力」から開始、続く前原理事長による理事長講演「これからの母性看護学」では、国際的視野にたった本学会の使命が確認されました。すばらしい講演内容に聞きほれている中、はっと気づくとこの時点ですでに進行時間は大幅にオーバー。次は学術集会会長石井による会長講演ですが、次の一般演題まであと15分も残っていません。一般演題のあとには会場を移動しての3つのワークショ

ップが組んであり、そのあとは懇親会です。時間がずれ込むと、各プログラムの進行に大きな支障をきたすこと確実でした。「時間が押してるよ!!」「どうしよう!!」事務局一同が冷や汗を流して見守る中、石井会長の「情報化社会とプライバシー」が始まりました。石井会長のスライド枚数を知っている事務局スタッフは皆はらはら、どきどき。ところが!!!てきぱきとした早口で、スライドも予定の半分におさえ、たった13分で講演は終了しました。当初のプログラムどおりの時間に終了です。さすが会長!!事務局本部では思わず拍手が起きました。なんでも会場係から『先生、15分で抑えて、15分!!』と強く言われて壇上にあがったということ。講演内容のすばらしさもさることながら、プログラムを遅らせるわけにいかぬ、という会長の強い役割意識に基づいたすばらしい「好演」でした。音声がつながらない!!

大会2日目にバーチャルシンポジウム「国際的視点から見た妊娠・出産の看護ケア」が開催されました。これは岩手県立大学と三重県立看護大学をギガ

ビットネットワーク(超高速デジタル回線)による映像で結び、2会場を同時中継しながら行うシンポジウムで、本学会に21世紀幕開けを飾る新しい試みでした。司会進行は山本あい子氏(兵庫県立看護大学)、シンポジストは、三重側から柳澤理子氏(三重県立看護大学)、岩手側から日本で双子を出産した経験をもつ英国人デボラ・ヘブルズ・本村氏と蛸崎奈津子氏(岩手県立大学看護学部)の3人です。会場の画面に柳澤先生の素敵な笑顔が大写しになり、いよいよ本学会初の試み、バーチャルシンポジウムが開始する、というその時です。何と、映像は送られているのに、音声が届かない!!あれほど入念にリハーサルをしていたのに、大事な本番でトラブル発生でした。困った、困った!!会場の皆さんの目の前で、冷や汗たらたら、悪戦苦闘の30分が経過し、ようやく音声がつながり、シンポジウムが始まりました。会場のスクリーンに大きく映し出された高画質映像により、2会場の距離が感じられない、まさにバーチャルなディスカッションが展開されました。トラブルも発生しましたが、その回復に向けてあれこれ調整する経過もひっくり返り、新しい試みを皆様に楽しんでいただくことができた、プラスに解釈しております。

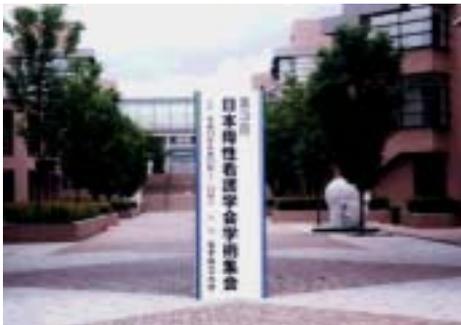
踊る場所が無い!!

学会1日目に行われた懇親会のアトラクション

では岩手県の伝統芸能「鬼剣舞」が披露されました。いよいよその勇壮な舞をご披露・・・というときに「この会場ではちょっと狭い!!」という舞の人。岩手県人でもめったに見ることができない「鬼剣舞」を事務局スタッフも楽しみにしていたのに、そんな・・・ということで、急きょホテルスタッフとともに、ステージの壇は取り除いたり、金屏風を下げたり...、皆さんが歓談するなかあわただしく場所の確保をし、ようやく始まったのでした。汗を流し息を切らした鬼たちの舞に、事務局一同大感激したのは、そんな裏方の大変さが合ったゆえかも...。

直接参加して、体験して、学んでもらう

今回の学会では、参加者の皆さんが自主的に参加し、実践しながら楽しく学ぶことができる3つのワークショップを計画いたしました。また、お子様連れの方でも安心して参加できるよう託児室を設けたり、職場に、家族に、お土産を購入しやすいように、学会場にお土産コーナーを設置したりするなど、参加する方々の「母性」に優しい工夫をしたことも特徴です。楽しく学ぶことから学問の追究ははじまります。参加が苦痛になるのではなく、子ども連れでも安心して参加し、楽しく学べる。母性の看護を追究する本学会が、そんな学会として益々発展していくことを願っております。



学会場(岩手県立大学)



西澤潤一氏(岩手県立大学学長)講演



学会場風景

バーチャルシンポジウム

懇親会 伝統芸能「鬼剣舞」

懇親会



カンボジア・スタディツアーに参加して

大平光子（大阪府立看護大学）

平成13年3月末の1週間、国際看護研究会が主催するカンボジア・スタディツアーに参加し、カンボジアにおける母子保健の実状と国際協力の実際に触れる機会を得ました。カンボジアの妊産婦死亡率は出生10万対470（1999年）と、アジアの他の国と比べても極めて劣悪で、死亡原因は妊娠中毒症、出血、感染、子癇です。高い妊産婦死亡率の背景には、妊産婦検診率が低いことや、Traditional Birth Attendant（TBA）による分娩の取り扱い、交通アクセスの不備、などがあります。今回はJICAの母子保健プロジェクトとSHAREカンボジア（日本の保健医療NGO）のTBAトレーニングプログラムを紹介したいと思います。

JICAの母子保健プロジェクトは、プノンペン市内にあるNational Maternal and Child Health（MCH）Centerで展開されています。ここでは、「安全な妊娠とお産」を目指して口コミあるいはテレビCMやポスター・パンフレットなどを用いて、妊娠期間中に1回でも妊婦健診を受けることを薦めています。そのほか、母親学級における栄養指導（写真左）、妊娠中の不安除去や正しい知識の普及のための啓発活動などに取り組んでいます。

活動の成果はかなり出てきているようですが、センターで働く看護職員に看護の概念がなく、血圧を測ることや注射、投薬が看護婦の仕事で、日常のケアは家族の仕事（家族は娘の出産のために村から市内に出てきて、毎日病院に通ってケアをしています）お産はTBAに！という考えが根強く、まだまだ課題は多いようです。



SHAREカンボジアは、プノンペン市内から50Kmほど離れた農村でTBAのトレーニングプログラムを展開しています。農村部では全分娩の90%以上をTBAあるいは助産婦が扱います。TBAの報酬は助産婦の約1/10くらいなので、慣習や経済状況からみても圧倒的にTBAの分娩取り扱いが多くなるわけです。TBAは母親の薦め、あるいは精霊のお告げによってその職に就くそうです。TBAとしての知識や技術はOld TBAと呼ばれるベテランのTBAや母親から伝承されます。その結果、重症の妊産婦が手遅れの状態になって郡のヘルスセンターに搬送されてくるケースが後を絶たないそうです。今回見学したfollow upプログラムは、分娩前の異常な徴候、妊娠期間中に行うべき診断（妊娠中毒症、胎児発育etc）、消毒、分娩経過中の異常の判断などについて、数ヶ月前に受けた講習内容を復習しながら、スーパービジョンを受けられるという構成になっていました。特に異常の判断に関することはロールプレイングを取り入れています（写真右）。プログラムへの参加率は高く（村のTBA7名中6名が参加）、新しい知識を得ることへの意欲さえ感じました。

これらの活動が上手く機能しつつあるのは、相手の文化や生活を尊重しつつ、一人ひとりの生命（生活）が、より健康により幸せに生きることをめざして援助する、という看護の基本を踏まえたアプローチによるものなのだろうと感じました。そしてまた、先進国の価値観で見ると貧困であり、保健・医療も立ち遅れてはいますが、湧き出てくる生命力や生活力を感じさせるカンボジアの不思議なエネルギーがこの活動を支えているようにも感じました。



編集後記：今回は、さまざま盛り沢山でお送りしました。第1号はいかがだったでしょうか？

今後は学会と学会会員、および会員相互の情報交換の場として年数回の発行を目指します。なにぶんまだ不確定な部分も多いため、会員の皆様のニュースレターに関するご意見・ご要望をお受けして、よりよいものにと改善を重ねたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。（成田）

発行人： 前原 澄子

編集担当者： 渡部 尚子 喜多 淳子
成田 伸 大平 光子

発行所： 日本母性看護学会

事務局： 〒514-0116

三重県津市夢が丘1-1-1

三重県立看護大学内

TEL 059-233-5605 / FAX 059-233-5666